

## 滋賀県東近江市の文化的景観調査

上杉 和央

滋賀県東近江市では、現在、市内の伊庭地区について国の重要文化的景観の選定を目指し、価値の調査がなされている。筆者は東近江市文化的景観保存活用委員会委員として、平成25年度より継続的に調査に携わってきた。

平成26年度に行った調査は、集落内の樹木分布調査である。また、伊庭地区については、筆者が担当している授業「文化的景観研究」における現地調査フィールドとしても設定し、学生が文化的景観の調査をおこなった。

なお、本年度の調査においては、島本多敬（文学研究科史学専攻修士2回生）のほか、上記「文化的景観研究」受講生が参加した。

また、地蔵および庭木調査も予定していたが、台風が直撃したために実施ができなかった。

### 1. 樹木分布調査

伊庭地区は大同川とそこから分水した水路網が卓越した集落である。また、以前は大中湖を通じて琵琶湖につながる集落であり、水路網と内湖・琵琶湖を使った舟運が盛んな地域であった。そのため、農業のほか漁業が展開する地域であった。

聞き取りを通じて、漁具の防腐剤として柿渋が使用されていたことが分かり、また、漁具の作製にシュロが利用されていたという。現在もなお集落を歩くと柿の木やシュロの木を目にすることができた。柿やシュロは伊庭地区の生業の歴史を象徴する樹木だろう。

また、伊庭地区は周辺の村落のなかでも大きな集落であり、地域の中心集落の1つであった。そのため、商店や料理屋などが展開したが、たとえば料理屋で琵琶湖の魚をふるまう際、臭みけしとして山椒が使用された。一般民家でも魚料理などで多用されたため、山椒も屋敷内で植えている様子が確認できた。

さらに、伊庭地区には「伊庭モモ」と呼称される固有のモモがある。聞き取りによれば、昔はいたるところにあったようである。

このように、伊庭地区の「地域らしさ」を象徴する要素として、集落内にある樹木があることが明らかとなった。そこで、伊庭地区における樹木の分布を①現地での視認調査、②アンケート調査、の二種類の調査を通じて明らかにした。なお、アンケートについては東近江市教育委員会が区長を通じて実施した総合的なアンケートの一部に組み込ませていただいた。現地の調査は下記の要領で実施した。調査には東近江市教育委員会ならびに伊庭地区の代表者に帯同していただいた。

1回目 平成26年5月24日 13:00-17:00

調査者：上杉・島本

2回目 平成26年6月29日 13:00-17:00

調査者：上杉・島本

これらの成果は次年度に刊行予定の保存調査報告書に反映される予定である。

## 2. 「文化的景観研究」による地域調査の実施

文化的景観は、自然、歴史、生活・生業の3つの点を重視しつつ「地域らしさ」を総合的に抽出していく調査が求められる。そのため、「文化的景観研究」の授業においては、文化的景観に関する制度やすでに重要文化的景観に選定された地域の事例について教授すると同時に、実際に現地に赴くことを通じて、文化的景観の価値を見出すことの難しさと面白さを体感してもらうことを意識的に行っている。上述のように、本年度は伊庭地区をそのフィールドと設定した。

「文化的景観研究」の受講生は、3～4名ごとに班を作り、班ごとに伊庭地区を調査することになった。先行研究をふまえて調査内容を決めた後に現地に赴くが、現地で調査内容が変わる班もいくつか見られた。もちろん、予習は重要なのだが、現地を歩く中でさらに面白い発見をするなかで変更されたものであり、その点でも現地調査を組み込んでいる意義は大きい。

なお、調査日については市教委や地域住民の方の援助が不可欠となるが、その負担も考慮し、上記1と同じ日程で実施した。ただし、班によってはインフォーマントの都合により別日に実施したところもある。



樹木調査の様子（平成26年5月24日 伊庭地区）